

肥後の仇討

の熊本の小山本妙寺清正公へ参詣の着た万助誠に旦那濟みませ
 んが私は彼の坊様を兩人でござりまする、矢張り熊本へ参る
 のでござりまするが、御同道は願入ますまいか、武家成程、何よ
 り易いこと、此方共は腕を以ての戦ひは誰に出會ふても恐れは
 せぬが、何うも歩きのには足が弱くつて誠に何うもならぬ、道
 の十里も歩けば最う足が棒のやうになつて了ふ質だから万助夫
 れは願うでもないこと、ござりまするは自慢ぢやござりません
 が、ウソと氣張りやア毎日續きませんが、二日や三日なら二
 十里や三十里の途を歩かすは、何うも坊様が其様にならば
 ません、武家成程、眞にさうだ、然らば恰度幸ひ同道しよう、
 万助有難うござります、是れだけの旦那方が一緒に持つて呉れ
 りやア夜半宿に同じやうに泊つても、川縦んば赤松源次郎奴が何
 様な廻し者を遣したとて氣遣ひはないと安心して、万助は其の
 武家の中へ坊様を雑せ歩いて貰ふことになり、此の武

肥後の仇討

家がまた珍らしい話をして退屈せぬやうに附合ふて善次郎を連れ
 て行つて呉れます、所へ其後追々三人参り五人参り同じやう
 の年頃の武家がドシ、後を追うて来ます、尋ねて見ると皆足
 が弱くつて歩けぬと云ふ、腕盛なれば恐れぬと云ふ、今日は妙
 な日だと、万助も思ひながら、小山本妙寺への参詣、是れは不思議
 待つて居る、誰に尋ねても小山本妙寺への参詣、是れは不思議
 なことだと思ひました、其の日の間に五十人の武家が連れに
 なりまして、思ひました、其の日の間に五十人の武家が連れに
 をして呉れる人で、皆黒田家の廻し者でござります、左様な事
 とは知りませんから、懇に申して万助は連れになつて貰ひました
 果せるかな此の五十人は万助主従の者を悉く肥後の熊本まで送
 り届けて呉れました、武家は是りや万助とやら、最う熊本へ来たか
 ら大丈夫だ、是れで別れるぞ、万助有難うござります、武家また辰
 りにや一緒に歸らうな、万助へ、有難うござります、

ツと此方に用事がありすが、歸りにはお目に掛りますか掛
 れませぬか、武家イヤ大丈夫だ、其方の用事が何日掛つても我々
 は待つて居て貴様等と一緒に歸るから万助有難うござります、
 武家安心いたせ、其方は高麗門の長谷川と云ふ屋敷に行くのぢ
 やらう、万助へい、武家最う我々は別れるから万助是りや妙ぢや、
 乃公の行く先まで知つて居るとは不思議なことぢや、と思ひな
 がらも、善次郎を連れて歸る右近殿の屋敷へやつて参りました
 長谷川殿方は疾に黒田源太左衛門殿から長岡殿へ向けてお話し
 があつて、細川家では夫れ、準備が出来て居ります、右近殿へ
 万助、参つたのか、万助、旦那様、有難い事にはお坊様でござりま
 した、右近、オ、然うか、万助、して森山の赤松は右近イヤ、心配を
 致すな、逃す氣遣ひはない、其方が来れば此方の一存を以て如
 何様にも出来るやうに取計らうて置いたから、草臥れぬへして
 居らねば明日にも討たして遣らう、万助ナ、貴下、草臥れぬへして

ますものか、で明日は何所で仇討が出来ます、右近、ア、半之丞
 殿が返り討ちになつた所の彼の西岸寺の川原を以て仇討の場所
 と取決める、万助有難うござります、お坊様、必ず油断なくお
 討りなされませ、臣の命は素より要りませぬ、善次、ア、万助や
 明日が仇討かな、万助、イヤ、お坊様、敵討でござります、お祖
 父様の敵、手を以て撃たぬとは云へどお父様が此の熊本へ向け
 て参り、他手に掛りなされたのも、皆赤松源次郎の故でござりま
 す、重なる意恨の主人の敵、汝れ討たいで措くものか、と万助
 は一心不乱でござります、萬事の都合をしてお遣りなされた
 長谷川右近殿、併し此の長谷川殿の役は餘程重い責任でござり
 ます、過つて此の子供に傷を附けさせるやうなことがあつては
 黒田家に對して申譯なく、且主人細川公に對しても申譯がござ
 りませぬ、また敵と云ふ奴は卑怯な奴ゆゑ其場から逃電するや
 うな事があつても言譯もなく、そこで兎やせん角せんと特に工

夫を疑し、万助なり善次郎は其夜は安心して枕に就きました。右近は中々安心は出来ません、討ちに出て居る者より討たせる長谷川の心の苦さは一通りならざることでござります、明くるを遅しと待ち兼ねて居りました。東雲の頃に相成りますれば疾に起き出で万助善次郎に食事をさせ、勝つて勝栗よるこんぶの式を調へ深く仇を報はせようと段々心を注いで言ひ聞かせ、西岸寺川原へ向けて同道いたすことになりました。早夜の明けぬ其の間から周囲には五十名の黒田家の附人が何れも夫れ川原に鳥鷲突いて居ります。刻限達は細川家より五十名是れ亦た屈竟の歴々の若武士、腕の達した人々が竹矢来より人矢来と、若し卑怯な事をして主従二名の者を返討ちにでもするやうな振舞われれば、黒田家に対して申譯ないと云ふので、細川越中守殿よりの御汰沙に依つて、兩名に若し危き事あれば踏込んで赤松源次郎の利腕を打落して呉れんと勢ひ込んで待つて居

りました。斯う云ふ次第でござりますから大丈夫な矢来が出来ました。其の間に町人共は聞き傳へて追々と西岸寺川原へ出掛けて参ります。纏て刻限は己刻頃になりますると、足輕共に取圍まれて高手小手に縛められて赤松源次郎は西岸寺の川原へ向けて歩んで参りました。多くの見物はヤンヤの聲、尤も万助善次郎の兩人は長谷川右近が隠して姿を見せません。纏て森山彈正を其所へ向けて引き据ゑさせ、長谷川は床机を離れて起ち上り右近コリヤ、森山彈正、面を上げよ、其方儀過ぎ去りし頃筑前福岡に於て須彌蒼海の恩義を受けたる岩井善右衛門をば殺害に及び、且亦た赤松源次郎と云へる實名を隠し京都の者なりと詐つて名を森山彈正と名乗り、當細川家に仕へたる段是れ不都合と云はん不埒と云はん、然るに岩井善右衛門の孫善次郎なる者並びに善右衛門伴半之丞の家来万助と云へる者、主従二名にて其方仕置の刀執りを願ひ出でたに依つて、此義細川越

る、今打たれた所へ此の糊の加つた奴が當ると痛くつて堪へら
 れません。ところへ庭に巻いた大小刀をガラリと放り出され、
 袴は小倉の糊加袴のカタ、帯は小倉の至つて堅い奴、人間は
 憎蕩で酷い奴だが着て居る者は堅いものばかり、是れが先方と
 自分とが五分々に腕の出来る者は加つてあつて打たれた所が摺れ
 なりますから、衣類が堅く糊が加つてあつて打たれた所が摺れ
 ても、痛いなと云ふやうなことは忘れて了つて、無我夢中に
 なつて戦ひます。先の者は子供と取るに足らない中間と斯
 う侮つて居ります。身軀の打たれた所へ着物の糊の加つた堅
 い奴が當ると、痛くつて堪へられませぬ。態と斯う云ふ事に立
 夫を致したのには長谷川右近の計ひでござります。尤も太鼓で立
 ち上り鐘にて止まるやうにとの言渡し、是れは仇討と云ふこと
 が許可になりましたなれば、双方膳部と云ふものが出まして毎
 々申上りまする通り夫れく形のあることとでござります。が、

中守殿より差し許すものなり、依つて汝こそは其儘首を刎ねな
 す。は最易きことなれど、憎むべき奴なれど、武士たる者の首
 を細目を受けたる儘刎ねさすのは細川家の耻辱と相成る。と
 ゆゑ、細目の振舞を致すに於ては其場を去らず立所に斬り捨てる
 若し身性の振舞を致すに於ては其場を去らず立所に斬り捨てる
 から左様に心得る。彈正委細承知を致しました。右近其の勝負以前
 に今日の仕置を申し渡すのである。汝が細川家へ仕官の際主人を
 詐つた廉に依り百の重鞭を申付け、是れから源次郎を俯向
 せにして置いて、尻を引つて腕の出来る若手に申付け、十
 人で百即ち一人前に十つと左の尻端を鞭つたのでござります
 を仕ない前に叩き討をしましたので、其上で衣類を下し置かる
 九次はと當つた着物で、裏には木曾街道ちやござりませぬが、九十
 九次はと當つた着物で、裏には木曾街道ちやござりませぬが、九十

表向は仕置と云ふの觸出してござりました。應てトシ、太鼓
が鳴りますると善次郎万助の兩名が出ました。善次郎は後鉢
巻禪の禪々しい出立ちにて善次赤松源次郎、お祖父様の敵、お
父様の仇、思ひ知れ」と名乗を掛けました。すると万助は大音
に万助ヤイ、汝れ赤松源次郎と云ふ盗人野郎、須彌蓋海の恩義
を忘れ岩井善右衛門の旦那様を撃つて立退くのみならず、汝れ
ゆゑに若旦那半之丞様までが名もない者の手に掛り、残念な目
に遭ふて最後をお遂げなされたのも皆汝れから起つたこと、イ
ザ尋常に坊様の刃に掛つて往生しる。此時源次郎も「汝等主
従返討らだ」と云ひたい所でござりまするが然う悪口は吐け
せん、周囲を見れば細川黒田の同勢百名スツと取り圍ひ、床
机に掛つて油断なく眼を着けて居りまする長谷川右近も素破と
云はし源次郎の刃物を叩き落して呉れようと、上から羽織は召
して居られるが下には禪の用意をしてござります、手には鐵扇

を持つて構へて居られる、實に右近殿一人の責任でござります
から斯うもあつたやうな等、兎角うする間に抜き放ちました一
を、年齢は行かないでも善次郎は太刀執る道位は教へてござ
ります、後に後見をして居る万助は何にも知らず、多くの見物
は如何なる事になるかと見て居る間に、今や双方勝負が始まり
ました、二打三打ち打ち合はす間もあらばこそ、善次郎の佩刀
は忽ち源次郎の一刀に絡まれて放り出される、何しろ微力の子
供のこと、段々後へ向けて寄りますると、見物人は「ワ、イ」と
云ふ聲見物ヤイ、助太刀なら加勢をせぬか、子供が危い」と
と云ふ聲が掛りました。此時万助は、「ホ、踏し」と云ふなり
突立上り佩刀を鞘共引抜き、見物ヤイ、夫りや間違つた
鞘を拂はなくつちや先方を斬ることが出来ぬや万助エ、刀
などは要るものか」と万助は佩刀を前方へ放り出してしまし
た、此の跡を見て源次郎はハテナと此方を見て居る間に、手早

云ふ、連れ、の、天へ、ま、れ、万、赤、り、ら、ふ、事、を、す、ま、い、も、の、で、敵、討、は、止、息、を、刺、さ、ね、ば、右、近、が、前、に、教、へ、て、さ、り、

ふ、く、緒、喘、ど、の、ひ、へ、突、同、れ、此、り、と、の、は、と、の、身、止、怯、な、奴、だ、か、ら、止、息、を、右、近、し、は、に、來、る、の、を、起、ち、上、つ、て、何、う、云、

物にそり「とどきをを立を代まの兩りく下を廻
 等て善と夫相り頼り歸よす名に御しり
 をで次あれまはれりよも時過をかし上
 お福郎のてはるまとの願に失申れ
 遣はよ兩名長川とて内出田ないま出忠
 しり名を谷川家が上は命にまよりやし物義
 相細筑川前右濟及入りて五筑前細も主
 成川福殿を頭此方御我居人上出さよ
 る家岡へを送りしと多少送るの者同道し
 借りへ送る方御我居人上出さよ
 て送る方御我居人上出さよ
 善次郎の方々を厚くに於て改めて黒田公
 御愛讀を賜りました段茲に御

にはお目通りを願ひ御禮を申上げました、主公の喜び一方ならず
 お譽めの詞を頂きました、知行は素より先代善右衛門の知行の通り
 相續することになり、知行は素より先代善右衛門の知行の通り
 御預かりの五百石を其儘下し置かれ、上の深き御褒美のお詞があり
 は實に珍しい所の者なりと云ふ、上の深き御褒美のお詞があり
 まして、新地五十石を下し置かれ、善次郎の後見を致し忠勤を
 盡せとの御沙汰、忝くお受けを致しました、忠義と云ふものは
 恐ろしいもので、僅かな煙草賣の万助も遂に五十石の武家分と
 なりました、岩井の家も其後長く富み榮えて居りましたが、如
 かなる故にや、後年に至つて此の善次郎の家は潰れて了ひました
 が、万助の家は近年まで岩井万助で以て黒田家に残つてござり
 ましたと云ふ、是れ偏に忠義の徳でござります、エー、長々伺
 ひ続けました岩井實記肥後の仇討のお話し、茲に目出度く満尾
 と相成りました、前編より引續き御愛讀を賜りました段茲に御

禮を申し上げます。

實岩 肥 後 の 仇 討 (大巻)

明治四十一年八月二十六日印刷
明治四十一年八月三十一日發行

肥後之仇討奥附

講演者 石川 一口

發行者 石田 忠兵衛

印刷者 蒲田 徳次郎

不許複製

大阪市東區安土町四丁目

發賣所 積善館本店

(電話) 東二一三〇番
(振替貯金) 三〇六六番

257
600

漢書

卷之六

漢書卷之六

大正十一年四月十日

...

...

...

...

...

...

貞

積

子

館

乃

乃

